

## Vulgarisateur と としての フォントネル

加藤 林 太 郎

## 一

フォントネルは生涯において二度、敗訴コース・ベルザイの側に立たねばならなかった。一度は家系上の理由から、コルネーユ派の一人としてラシーヌに対抗したことであり、他の一度は、科学の分野に於いて、ニュートン説のフランスへの侵入に抗して、最後のデカルト派としてむなしく闘ったことである。しかしこの二度の敗訴にかゝらず、フォントネルは十七世紀に始まった二つの《modernisation》の運動の旗手として、文学史上、思想上に確実な地歩を得ることができた。すなわち彼は、ペローとボワローの間に始められた謂わゆる〈新旧論争〉に於いて、時機を心得た、そして現代派の中で恐らく最も根本的な意見を表明した発言者として登場した。文学から古代人の後見を拒否することを目的としたこの論争は、これもひとつの《modernisation》にはかならないであろう。しかし〈現代化〉は、もちろん、〈世俗化〉の意味を帯びて科学および宗教にかゝわる時、更に重大な様相を示すが、フォントネルの創作活動のいくつかはこれに関連して行なわれたのであった。それは《Entretiens sur la pluralité des mondes》(1686)および《L'Histoire des Oracles》(1687)によって代表されるであろう。これらはしかし、科学、思想に直接貢献する業績では決してなく、いずれも社会的な《vulgarisation》の作品であると言わねばならない。従って、素材そのも

のに獨創性は存在しないのである。前者はコペルニクスの地動説とデカルトの《tourbillon》の説によって新しい宇宙像を物語る対話であるし、後者はオランダの医学者、ヴァン・デルの著わした「神託の歴史」のラテン語よりの翻訳という型を借るものである。いずれも、科学史上、あるいは宗教史上の大きな問題にかゝわるものであるが、題材においてオリジナルであることを元来もとめていないのである。むしろそれらの問題を《vulgariser》したこと、ならびにそのvulgariserした方法に価値が認められるのである。《Entretiens sur la pluralité des mondes》は、ある静かな城館<sup>シヤトウ</sup>の夜の庭で、貴婦人とその友人あるいは恋人である人物との間に、六夜にわたって続けられる天体についての対話である。そしてその雰囲気と対話人物から考えられる様々の牧歌的でギャランな調子に満ちている。後にも述べるのであるが、これらの調子に嫌悪を感じたヴォルテールが《Micromégas》(1752)の中で巧みなパロディを挿入している。こうした科学思想（これをフオントネルはphilosophieと呼んでいるが）、この種のphilosophieと文学との結びつきは社会に対して決定的な影響力をもつに至った。そしてその意義は、従来一般に受け入れられる形式をもたなかった科学思想に、当時にあつては最も信用のある形式であるところの〈文学〉を与えたことにあるとされている。科学知識、科学思想に一般の人々が親しみをもち、またあらゆる作家が気易く科学に接近するという一種の時代的現象を生み出した原因となつたものと認められ、この点で十八世紀の開幕を告げる作品とされる所以である。こうしたユニークで同時に影響力をもつた形式、すなわち科学と文学の結合は、フオントネルの教養の性格から説明がつきやすいのである。すなわち、フオントネルはコルネーユの甥に当り、また作家としては、一個のbel espritであつて、ラ・ブリュイエールの《Les Caractères》にCydias<sup>(1)</sup>という名前で痛烈なポルトレを描かれるに至つたような《Mercure galant》の気障な常連作家であつたこと。また一方、若くから科学者と交際があり、一六九九年からはAcadémie des Sciencesの終身書記となつた様な科学界の一員であること。これらのことによつて説明

がつくのである。このように科学と文学はフォントネルの中で出会い、そしていさか逆説的な両者の結合はこの作家の才能によつて成功を見るに至つたと考えられるのである。しかしこの結合が、その成立の条件においても、また結果たる作品においても、あまりに自然であるために、あくまで、そこに起つたことは文学と科学という二つの異つたジャンルの出会いであるという巨視的な見方で十分な様に思われがちである。しかし、これらの作品の序文でもわかるように、作者は自分の採つた表現の方法について、その存在理由を述べるに足ると考えていたのであつて、その特定の表現方法を要求するところの読者について述べているのである。すなわち、科学と文学という関係は、更に、新しい主題たる科学とその読者という関係に置きかえられて登場して来るのである。そして更に、科学はそれを行なうところの科学者《savant》において考察されねばならず、こゝにフォントネルの考えを見出せると思うのである。要するに〈科学と文学〉を〈科学者と読者〉という段階に下げて、フォントネルの考えを見たいと思うのである。

(1) De la Société et de la Conversation-75.

## 二

《Entretiens sur la pluralité des mondes》の序文は、この作品が、科学知識そのものではなく、vulgariser したものであることを強調している。そうした試みがなかつた当時においては、ぜひ、その特殊な性格を説明してかゝる必要があつたのだと思われるのであるが、この序文は簡潔ながら作品について全てを言い尽しているように思われる。すなわち、読者に向つての読み方の注問、主題の性格、登場人物の選択、オルスマン アレクサン装飾、冗談の入れ方から、考えられそうな反論に対する予備的な返答までそこには書かれている。なかでも、読者の想定については実に細心の配慮が払われて

いるのであって、自分としては、天体に関するこの話を *gens du monde* にとって無味乾燥にすぎぬよう、また一方 *savants* にとっては、あまりに冗談めいているとされぬよう書いたつもりだが、この作品の中に *savant* は学ぶべき何物も見出さず、*gens du monde* はいずれにしても学ぶ気はないのかもわからないと言っている。誰にでも向いたものを書こうとして結局誰にも用をなさぬものにしてしまったかも知れないのである。ともかく、読者のうち既に自然科学について知識のある人は、こゝに有用性を見出そうとせず、既に知っていることを楽しく読めばよい。また全く知識のない人は、これによって楽しむと共に学ぶべきであると言っているのである。しかし予想の対象となる読者はあきらかに後者、すなわち教えてやることができ、同時に楽しませることもできる門外漢の読者であろう。そして本来真面目で厳密な主題を扱いながら、飾りとしていろいろな脱線と冗談を入れる権利と楽しみを手に入れるため、会話の形式を借りたというわけである。ところで最も興味深いのは、作者がラ・ファイエット夫人の《*La Princesse de Clèves*》を引合いに出していることである。「女性読者はこの、天体に関する体系を理解するのに《*La Princesse de Clèves*》の話の筋立てを理解して行くのに必要とするだけの注意力があれば足りる」と言うのである。この作品があながち文学と異質のものではなく、むしろ、文学に接するのと同じ気持、同じ労力でよろしいという著書の悠るやかな性質の強調であろう。

これらは全て、新しい主題に対して読者を招待するという形をとっているが、その翌年に書かれた《*L'Histoire des Oracles*》の序文では、もっと遠慮のない考察が現われて来る。これは宗教史上の議論を扱ったラテン語の論文の翻訳ではあるが、「それを読んでもらうためには全く作りかえねばならなかった」というのである。ラテン語の原作では議論は遠慮なく校分れし、錯綜し、無秩序のきわみである。しかしそれはこの作品が学者相手に書かれているからで、彼らは読むことに関しては疲れを知らない人々だからだというのである。一方、自分が相手としなければな

らぬ読者たちは、云いまわしや、表現や考え方の面白さを何よりも愛好する読者ばかりで、従って教訓や、時には冗談まで入れて書かねばならない。その上、読者というものは実に怠慢であって、読む本の中に美しく整った秩序があって、注意力は可能なかぎり必要とせぬように計ってもらいたがる。従って、自分は、飾りになるものは全て、また問題の理解を明晰にするものは全てを投入し、その上、やさしい会話の文体を用いて書きかえたというのである。こうした数々の考察と配慮を伴ってフォントネルの文体は創り出されたのであるが、しかし、これにはまた恐るべき敵があった。即ちあのヴォルテールである。ヴォルテールはスウィフトの《Gulliver》にならって書いた《Micromégas》の中でシリウス星の巨人ミクロメガスの宇宙旅行の道連れに、土星のアカデミーの書記長を登場させるが、これがフォントネルの戯画であることはよく知られている。この書記氏は、自然は変化に富んでいるというたゞひとつのことを述べるのに、ミクロメガスがさえぎるのも聴かず、花壇の花だ、美人の首飾りだ、画廊に掛った絵だと限りなく比喩を連発するのである。ミクロメガスがあきれて理由をたづねると、「貴方の氣に入るため」(pour vous plaire)という甘い答がかえって来る。これは「理性<sup>(9)</sup>である時には氣に入るべからず」(La raison même ne doit pas dédaigner de plaire quand elle le peut)と述べたフォントネルに対して残酷なまでに焦点を合わせた一語であろう。ミクロメガスは遂に業を煮やして、自分は面白がらせてくれる必要などはない。学びさえすればそれで結構という。しかし、このパロディが痛烈であるのは、こうした文体が、読者のためにやむなく採用された方法的なものではなく、フォントネル固有の文体だからであり、楽しい表現を探し出し、整理された明晰な文を書くのは、彼の才能と好みから来ることである。新しいマチエールと読者の間の距離はフォントネルにあつてはたいした問題ではなかったのである。

- (1) Les Entretiens sur la pluralité des mondes, préface. (œuv. tome II, p. 5)
- (2) L'Histoire des Oracles, préface. (œuv. tome II, p. 208)

- (3) Micromégas, histoire philosophique. (Chap. II.)  
(4) Eloge de Monsieur Fagon. (œuv. VI, p. 46)

### 三

ところで、こうした表現に対する配慮は、フオントネルにあつてはあたり前のことでもあり、一種の快楽でさえあつたから、こうした配慮を怠るもの、あるいはこれに反抗するものに対する批判が生れて来るのは当然である。学術書の著者は、一般にこれを軽視するけれども、困難で抽象的な内容のものには結局大部分の人が、わかり易い説明や、云いまわしや、面白さなどを要求しているのである。ことに数学では bons livres はあつても livres bien faits は少いのが現実だ。<sup>(1)</sup> 著者は内容がよければ表現の形式の方はどうでもいゝと考えがちであると言うのである。ひとつには能力の問題でもあつて、全てについて知っていないながら、同時にフランス語をよく知り、よく書ける人は少いと《Eloge》の中で述べている。フオントネル自身の言い方によると、barbareでない érudition は珍しいのである。<sup>(2)</sup> érudition は《paré et embelli par une facilité agréable de bien parler》であることが望まれたのであつた。<sup>(3)</sup>

この様に表現方法に対する無関心が既に一個の問題であり、一般に理解されることを徒らに妨げているのが実情であるが、更に悪いことには pédantisme が加わつてくる。前時代の化学者が obscurité を好んだことは、科学者の Eloge の中でしばしばフオントネルの繰り返すことであるが、例えばライプニッツが、錬金術の団体に、研究のため入会させてもらおうとした時の逸話を語っている。<sup>(4)</sup> 彼は化学の本から特にわかりにくい表現ばかりを抜き出し、自分でも意味のわからない手紙を作り上げて、これを会長に差し出したところ。学識深いものと認められて喜び迎えられ

たものである。mystère は化学者たちに通有の風習であり、ことさらに示すのとは反対に、ことさらに隠すだけのことであつて、見せびらかしの精神であることに変わりはない。これが savant に特有の欠点ということになるのである。当時に行なわれた言葉の広い意味で philosophie というのであるが、おもむきあり、楽しさあるものを全て追い出してしまふのは philosophie そのものの罪ではない。それは philosophes 達の不正な行ないなのであつて、彼らは自分を他から際立たせるものだけを誇示したのである。これは savant 一般の悪徳にはかならない、と述べるのである。このようにして結論できることは、マティエールとしての科学が一般の読者と対立する上に、更にその離反を助長しているのは、科学者の側における表現に対する怠慢、および pédantisme の精神であるということになるであろう。

フォントネルはこの様に《vulgarisation》ということをして、彼自身の教養の二重性と才能とによる、特殊で一回きりのものとは考えず、savant が心掛けるべき本質的な仕事のひとつと考えたのであることがわかる。すなわち、知識は個人として所有されるだけではなく、広く伝わって行かねばならぬもの、謂わば《lumière》でなければならぬという考えが、読者を常に予想と意識の中に持っていたフォントネルの大胆で新鮮な考えであつたと言えるであらう。彼自身は一箇の発見もしなかつた単なる科学アマチュールの域にとどまらねばならなかつたのではあるが……。

- (1) Eloge de M. le Marquis de l'Hôpital. (œuv. tome V, p. 90)
- (2) Eloge de M. l'abbé Gallois. (œuv. tome V, p. 181)
- (3) Eloge de M. Fagon (œuv. tome VI, p. 46)
- (4) Eloge de M. Leibnitz (œuv. tome V)

#### 四

こうした文体への配慮によって vulgariser されたものは、なるほど一般読者に接しやすくなる。またその表わされる形式は文学のそれに近いということは言える。しかしこれが文学と類似したものとして受け入れられた事実を十分に説明するものではない。我々は、『vulgarisation』のもつ意義の中に、読者への接近という外延的な機能だけでなく、更に、矛盾の構造とも呼ぶべき内部構造の形成に対する働きがあることに注意したい。

フオントネルは先にのべた二作品に先立って『Dialogues des Morts』(1683)と題された作品を書いたが、これはフオントネルの方法を端的に示すものである。これはエリゼーの野における古今東西の死者達による対話集であって、そこに見られるのはあらゆる風変りな組み合わせによる議論なのである。アレキサンダーはギリシヤの美妓フリユネと、またソクラテスはモンテーニュと対話する。夫々の登場人物は、もちろん、この世でもっとも考えのせまい人間として議論を交わすが、作者がこゝで提供するものは、極端であるが故にはなやかな議論、および偶像の破壊であった。フオントネルは、この作品においてすでに〈新旧論争〉の現代派であって、議論で敗れるのはほとんど常に古代人なのである。アレキサンダーの偉大、自殺するローマ人のストイシズム、いずれもその權威を失墜せしめられる。ところで、これが一個の文学作品として成り立つのは、多くは尊敬に傾いた古代人に対する社会的通念と、それに対抗するところの一見奇矯だがある種の強さを持った逆説という二つの要素の存在するためであろう。こうした、社会的通念―常識を逆撫するという手法を彼はその後もつねに保持したのであり、『Entretiens...』の天文学に関する対話も、この一例にはかならない。地球は宇宙の中心として不動であり、恒星は天空にあいた穴であり、他の星に人が



住むわけがないといった常識に対して、こゝに現われるのは今度は奇抜な議論ではない。むしろ完成されて間もない科学的宇宙理論である。しかしこの新しく精密な理論は読者の理解の外にあり、《社会的通念》と共に読者の精神を要求して一作品を成立せしめることができない。どうしても、それは読者に理解され、通念に対立する良識として働かねばならない。作者が《通俗化》に努力するのは、従つて、これを目的としてでなければならぬ。一人の貴婦人に向つてその友人が科学上の新知識を説明して聞かせるという《Entretiens...》の設定は、こうした要求から生まれ出たほとんど唯一のあり得べき型であると云つてよいであらう。生の知識はいかにそれが真理であつても一般の通念とは出会いをもたず、社会的通念が真理によつて驚かされることを求める作者にとつては無用と思えるのである。《学者》と貴婦人の対話は生れ出て来ないのである。また一方、聴き手の婦人はあくまで良き平凡人であることのみが必要なのであつて、《Entretiens...》は《Les Femmes savantes》とは全く違ふのである。

この様にして《vulgarisation》は《知識》を《良識》に変えることにはかならず、良識は常に精神に対して健全な打撃を与えるものであるから、フォントネルは vulgarisateur として、科学の分野で二流の余計者の活動をしていたわけではなく、むしろ文学の領域で働いたのであると言つてよいであらう。しかし、常に真の知識の持つ力のみを素材としていたのであるから、空想の科学を扱う Science-fiction におけるとは、科学と文学の結合の様式が異なるのである。

良識と社会的通念、この二つを要素とする文学の流派は確実にその後も存在を続けて来た。これは十八世紀に發展を見せ、以後これを模範とする知的で批判的な文学の数々を生み出している。しかし文学史家の述べるように、現代は未だに続くロマン主義の時代であつて、知性の文学はほとんどその市民権を失つていると言えさうである。passion humaine の condition humaine の間の暗い関係は想像力によつてしか理解され得ず、この《想像力》を欠き、あるい

はこれに反抗するものは、文学の中にその身を置くべき場所を持たない。フォントネルはそうした知性の文学が快く迎えられた短い、特権的な時期に生きた人であるのかも知れないのである。しかしわめて知性的な彼の作品が、精神に対してどれほどの衝撃力を持っていたかを想像するためには恐らくたゞひとつの方法しかないのである。それは、現在我々が突然に、地球は宇宙の中心であって不動、他の全ての諸天体が我々の周囲を回転するのだという地動説的宇宙像の正当性を知らされた時に覚えるであろう衝撃を心に描いてみることである。彼の作品が精神に作用した力を、逆の方向からこれははゞ確実に量らせてくれるのである。

テキスト—Oeuvres de Monsieur de Fontenelle; Librairies associées, 11 vol.; 1758-1761.

—関西学院大学文学部専任講師—